

“自分だから”できることが、きっとある。



大谷中学・高等学校を卒業した先輩たちが学生時代を振り返りながら、ここで得た気づきや現在の自分に息づくもの、未来へのヒントについて語るインタビュー企画。

第三回は、横浜DeNAベイスターズで投手として活躍し、スポーツ研究職を経て、株式会社BaseballQを設立。現在は東京大学大学院で特任研究員として研究を続けながら、埼玉西武ライオンズのパフォーマンスアナリストとして新たな道を切り拓く福田岳洋さん。後編では、続けることで見出した自分自身の在り方、進路や夢への向き合い方についてお話しいただきました。

「今」に縛られて、
可能性を諦めないこと。



「KAMEOKA OTANI STADIUM」の開場記念イベントにて、生徒からのインタビューに応える福田さん。

——今年、大谷中学・高等学校は創立**150**周年を迎えました。そのテーマが「樹心(じゅしん)」なのですが、樹心という言葉は覚えていらっしゃいますか？

福田岳洋(以下、福田):もちろん覚えています。「TO BE HUMAN」と一緒に掲げられていた学校の理念ですね。自分がそれに重なる何かをしてきたか？と聞かれると、正直あまりピンとは来ないのですが、これまでの人生について改めて振り返ってみると、人と人との縁や、人間のおもしろさ、心というものについて考える機会がたくさんありました。そういう感覚って、大谷高校で無意

識に育まれていたものなのかもしれません。教えられたというよりは、気づいたらそこに根付いていたような。意識して見るものではなく、心の中にあるものが「樹心」なのかなと思います。

——学生時代を振り返って、今の自分を作り上げた“土台”があるとすれば、それは何だと思いますか？

福田：高校時代に、大谷高等学校出身で当時横浜ベイスターズで活躍されていた波留敏夫さんが、練習を見に来られたことがありました。スイングやバッティングを目の前で見て、「さすがプロ野球選手だな！」と思ったことをよく覚えています。その時にさせてもらった会話の中で「意志あるところに道は開ける」という言葉があったんです。僕の中にはずっとそれが残っていて、よくある言葉かもしれないけれど、今も大事にしています。後から波留さんに、「あれは僕の言葉じゃないよ」と言われたんですけどね(笑)

自分はエースだったわけでもないし、決して順風満帆な高校生活ではなかったけれど、「野球が好き」という気持ちだけはずっとありました。プロ野球選手になりたいと強く思っていたわけではなく、ただ野球がうまくなりたくて続けていたら、結果としてプロになれた。本当に、すべては縁だと思います。



創立150周年記念事業の一環として、本格的な球場へと生まれ変わった「KAMEOKA OTANI STADIUM」。

——今まさに、進路や夢に迷っている人も多いと思います。そんな人たちへ向けて何かアドバイスはありますか？

福田：やりたいことを見つけて、さらにそこから一つに絞るなんて簡単なことではないですよ。僕なんか本当に中途半端で、特別頭が良かったわけでもないし、強豪校のエースだったわけでもないし、素行も……良くはなかったです(笑)。でも、周りに支えてくれる人がいたから、勉強も野球もなんとか続けられました。きっと逃げ道というか、いろんな方向に進める“基礎体力”みたいなものがあったんですよね。

長い人生で見れば、高校の時の差なんて大したことじゃないと思うんです。どれだけいい大学を出ても、その道で10年、20年何かを続けている人の方が優秀だったりするし、継続することが結

局いちばん力になる。僕も、厳しい練習についていったから身体も心も鍛えられて、大学やその先でも踏ん張ることができました。

立ち止まらなかったことが、唯一の才能。



「プロとアマチュアの差は、技術よりも心理状態に大きく現れる」と語る福田さん。それを整えるのがパフォーマンスアナリストの仕事でもある。

——その基礎体力は、知らず知らずのうちに積み重なっていたもの。

福田:そうですね。プロ野球選手になっても、失敗や挫折のない人なんていません。華やかに見える世界でも、みんな苦しんでいるし、痛い思いもしています。だからこそ、学生のみんなには、「今うまくいってないから」という理由だけで自分の可能性を諦めないでほしいし、やりたいことをすぐに手放さないでほしいです。

——動き続けてきた福田さんだからこそその言葉ですね。

福田:本当におもしろいと思うのは、途中でどれか一つでも辞めていたら、今の自分はないということなんですよ。ちゃんと勉強を続けていたから京都大学の大学院に入ることができたし、野球を諦めずに続けていたから、独立リーグを経てプロにも呼んでもらえました。立ち止まらずに続けてきたことだけが、自分の才能というか、力なのかなと思います。

——これから先、新たに取り組んでいきたいことや目標はありますか？

福田:やっぱり「研究」ですね。今は東京大学の大学院で認知科学の研究をしていて、例えばVRやアイトラッカーを使って、打撃におけるタイミング能力や、守備・打撃中の目の動きを計測したりしています。マウンドに立った時、「この筋肉をこう動かして……」なんて考えながら投げたりはしません。的を視て、そこに身体が反応して投げる。つまり、脳や神経経路、心理状態がすごく重要になってくるわけです。自分がプロ野球を経験しているからこそアイデアも出るし、東大にいるから、これが新しいことだと分かる。両方の世界を見てきた自分だからこそ、できることがあると思っています。

クビになった自分だから伝えていけること。



「クビって本当に嫌な言葉ですよ。でも、何も無くなった時にこそ見えてくるものがあるし、支えてくれた人に本当に感謝しています」（福田さん）

——福田さんの第一章は“野球選手”。第二章が“研究者”。第三章はどうかと思われますか？

福田：最近自分でも考えたりするのですが、「マネジメント」でしょうか。人間って本当におもしろくて、同じことを言っても選手によって全く反応が違います。ある選手には響く言葉も、別の選手には全く届かなかったり。技術面で言えば、たくさん打つことができる選手であっても、必ずしも守備が上手いわけではないし、チームにはバットコントロールや守備が得意な選手も必要です。集

団として優勝を目指すって、そういう複雑な人間関係をまとめて、個々の能力を分析していくおもしろさがあるんですね。

——どの章も、やはりすべてに野球が通底していますね。

福田：やっぱり、好きだからでしょうね。プロ野球選手と聞くと、みんな桑田真澄さんや大谷翔平くんのような人を思い浮かべると思います。「プロ野球選手＝福田岳洋」だと思う人は正直いないですね。でも、桑田さんが伝えられることと、僕が伝えられることは違います。桑田さんに「野球の楽しさや素晴らしさ」を伝える役割があるとすれば、僕が伝えるべきなのは、「人生の難しさ」や「縁の大切さ」、「続けることの意味」なんじゃないかと思うんです。だからこそ、クビになった経験や裏側の葛藤を自分なりに誰かに伝えていくことに価値があると、今はそう思っています。



<PROFILE>

福田 岳洋 **Takehiro Fukuda**

1983年、大阪府生まれ。大谷高等学校から高知大学を経て京都大学大学院へ進学。その後2008年より独立リーグ・香川オリーブガイナーズへ。ドラフト指名を受けて2010年に横浜DeNAベイスターズ入団。2013年の引退後は、早稲田大学大学院へ進学し、NTTコミュニケーション科学基礎研究所(スポーツ脳科学プロジェクト)でリサーチスペシャリストとして活動。現在は東京大学大学院で特任研究員として研究を続けるかたわら、自ら株式会社BaseballQを設立し、パフォーマンスアナリストとしてプロ野球に携わっている。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Michiko Wakabayashi